

重点研究室・光触媒グループ中間評価報告書

日時： 平成 21 年 2 月 24 日（火） 14:00～16:00

場所： KSP 東棟 202 KAST 会議室

（委員）

入江 正浩（立教大学 理学部 教授）

庄野 晋吉（財団法人日本板硝子材料工学助成会 理事長）

竹内 浩士（独立行政法人産業技術総合研究所 環境管理技術研究部門 主幹研究員）

渡部 康一（神奈川県 政策部総合政策課科学技術大学連携室長）

（報告者） 重点研究室・光触媒グループ・グループリーダー 藤嶋 昭

平成 21 年 2 月 24 日、標記研究グループの中間評価に関する研究課題委員会を開催した。委員会においては、藤嶋グループリーダーより成果報告及び自己評価報告を受けた後に質疑を行い、その後委員による審議を行った。その結果を次の通りとりまとめたので報告する。

この 2 年間の業績は顕著であった。特に、超親水性／超撥水性パターンニングの技術を用いて、オフセット印刷（カラー）を実現するという成果は評価に値する。また、酸化チタンをナノチューブ状にする研究は、光触媒性能の向上の観点からも大変興味深いものである。

短期間で実用化をめざす事例として光触媒空気清浄機付人工観葉植物の開発もすすめた。短期間で実現可能なものと中長期で実現を目指すものとを、バランスよく組みあわせて研究がすすめられている。研究成果の権利化も図られて、技術移転の観点からも配慮がなされている。

新しい技術を実用化へもっていくには種々の困難がある。企業は設備更新をしてまでも新しい技術を導入する意欲は、最近は特に小さい。長期的に基礎となる技術（特に環境分野において）を開発する姿勢が重要である。課題解消が望まれるニーズ調査を行い、シーズとマッチングさせる工夫も望まれる。

研究費については、積極的に企業や独立行政法人等から確保するように努めており、その規模や参画している企業の数をも評価に値するものである。光触媒オープンラ

ボや光触媒ミュージアムの負担金については、企業を取り巻く環境が一層厳しくなることに鑑みると、現在の収入規模を維持することは大変厳しいものになる。しかし、光触媒ミュージアムの運営や小中学校に出向いての理科実験などいわゆる出前事業については社会貢献の観点からも大変有意義なものであり評価に値するものであるから、今後もより一層の工夫をして財源の確保に努められたい。

その他に、平成 18 年度から平成 19 年度にかけては、論文発表等の件数が倍増しており、活発に成果の公表に努めたものであると評価できる。研究員全員の発表の機会を増やし、グループ全体としての裾野を広げてほしい。

また、研究員の入れ替わりが、やや頻繁であると見受けられる。このこと自体は、研究員の交流を活発にして研究の裾野を広げるために有意義であるが、人材の入れ替えが研究活動の継続性に支障を与えないように留意してもらいたい。

超親水性／超撥水性パターンニングや酸化チタンナノチューブに関するものは優れた研究成果であり、今後の活用が大いに期待される。このような基礎的研究を今後とも中断することなく、積極的にすすめられることを期待する。

平成 21 年 3 月 31 日

委員長 入江正浩

